

町民文芸



只見短歌会 令和五年十一月詠草

久びさに逢へば互に老を言ふ友は次つぎ旅立ち行きぬ
馬場 八智

逝きて久し姑に齡の近づきぬお下がり我に無理なく馴染む
目黒 富子

おねだりの身振り覚えた我が息子上目遣いは妻より賢し
立花 奏音

救急車のストレッチャーから手を振りぬ古い母の姿最後まで知らず
新国由紀子

伝統の只見の手毬復活に取り組みたれば五年過ぎたり
渡部ヨリ子

月光の明るき夜は灯を消してゆるる秋ざくらの影ながく見つ
故 新国 洋子(遺作)

只見俳句会 十一月定例会

日高俊平太 指導

秋の雨暑き吸い取るようにな
紺 青

学ぶのは生きることなり冬紅葉
忍び寄る冬の気配や茜空 信

立冬や二人暮らしの杳あまた
恒 夫

秋彼岸忘れし杖は畑中
秋晴れに医者のはしごをいたしおり 都

悼 吉津善也兄
芳香や山へ飛び立つ冬の蝶

ひざかりに寄せては均す新小豆
家事農事動く掌秋灯下 礼

月光のやわらかに射す花田かな
只見線山の紅葉も賑やかに 真理子

太っちょの野菜摘んで冬待ちぬ
芍薬根分けてもらいし色ごとに 一穂

旅先の湖上の闇に十三夜
冬支度梯子の上から立ち話 修一